View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

The Journal of the Department of Social Welfare,
Kansai University of Social Welfare Vol.*17-2, 2014.3*
pp.*9 − 15*

原　著

社会的養護児童と地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程
―社会的養護児童の子育ての社会化に注目して―

The process in the formation of relationships between the children in social care and the "people, things and affairs" in the region; focused on socializing child-rearing

井上　寿美[*1]，笹倉千佳弘[*2]

要約：本研究の目的は，児童養護施設で育つ社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程を，社会的養護児童の子育ての社会化に注目して明らかにすることである．「ホームスティ事業」に参加した社会的養護児童のエピソードをとりあげ，「生きられた経験」の観点から分析を加えた結果，社会的養護児童の子育ての社会化において，①無意味な関係から有意味な関係が形成されるという過程，②一方的な関係から相互的な関係が形成されるという過程，③個人的な関係から共同的な関係が形成されるという過程が明らかになった．この結果をふまえ，次の２点について考察した．①社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で３とおりの関係形成過程が認められたということは，社会的養護児童に認識の変化が引き起こされたということである．②社会的養護児童の認識の変化要因は，ホストファミリーによる「順接の受けとめ」である．

Key Words：児童養護施設　生きられた経験　認識の変化

１．目　的

本研究の目的は，児童養護施設で育つ社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程を，社会的養護児童の子育ての社会化に注目して明らかにすることである．

先行研究によれば，子育ての社会化に関しては，育てる主体である親の側から議論されたものが多く，育つ主体である子どもの側から議論されたものは，管見の知る限り，森田と網野の論稿のみである（井上 2012）．森田（2000）では，子どもが仲間のいる社会化された場所を獲得することに子育ての社会化の意義があると述べられている．網野（2000）では，子どもが親以外の社会的親による多様なモデリングを獲得することに子育ての社会化の意義があると述べられている．いずれの議論も子どもの側から論じられているが，親による養育に期待することが容易である子どもを対象としており，親による養育に期待することが困難な社会的養護児童を対象としてはいない．

なお本稿では，子育ての社会化ということを，森田（2000）に依拠し，子育てという行為を個別化，個人化，私有化させずに集団化あるいは公然化させ，社会で共有することであるととらえている．したがって，社会的養護児童の子育ての社会化とは，親による養育に期待することが困難である子どもを育てるという行為を，児童養護施設の職員だけで担うというように，個別化，個人化，私有化させたものとせず，その行為を，地域の人たちも施設の職員と共に担うというように，集団化，公然化させたものにすることであると理解している．

２．方　法

２－１．調査目的・内容

岩手県西和賀町[1)]で実施されている，地域養護活動としての「児童養護施設の児童を年間を通してホームスティさせる事業」（以下では「ホームスティ事業」とする）に参加した子どもと彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひ

2013 年 12 月 2 日受付／ 2014 年 1 月 22 日受理
*1 Hisami INOUE
関西福祉大学　社会福祉学部
*2 Chikahiro SASAKURA
就実短期大学　幼児教育学科

1) 西和賀町は，岩手県西部に位置し，奥羽山脈の山岳地帯に広がる，南北約 50km，東西約 20km，総面積は 590.78 ㎢，人口 6,530 人，世帯数 2,437 世帯（2013 年 4 月現在）の，豊かな自然に囲まれた地域である．町の南北に和賀川が流れ，81.5％を山林が占めている．2005 年に旧沢内村と旧湯田町が合併して西和賀町が誕生した．

と・もの・こと」との関係形成過程を，ホームスティ事業に関わった人の「生きられた経験」[2] から明らかにするために，ホストファミリーに対する聞き取り調査をおこなった．ここで言うところの地域養護活動とは，日常生活から離れた地域をフィールドとして，児童養護施設の子どもを児童養護施設の職員と地域住民等が協働して養護する諸活動のことである．

ホームスティ事業とは，NPO 法人輝け「いのち」ネットワーク（以下では「NPO いのちネット」とする）が中心となり，2008 年５月から本格的に実施されるようになったものである．その目的は，被虐待児の「人間復興には地域の生活体験が必要」であるため，「『人・自然・文化』に恵まれている西和賀で（中略），子どもたちの優しさを育んでいく」（NPO 法人輝け「いのち」ネットワーク 2010：2）ことである．たとえば2009年度には，ホームスティ事業へ協力を申し出た西和賀町の５世帯が，岩手県内にあるＡ児童養護施設とＢ児童養護施設からやってきた 10 人の子どもを，１世帯に２人ずつ週末に１泊２日で受け入れることを，年間を通して 10 回おこなっている．

ホームスティ事業に参加する頻度は子どもによって様々である．複数回参加する子どもであっても，常に同じペアで参加するわけではなく，また，常に同じホストファミリーに滞在するわけでもない．『平成 21 年版 高齢社会白書』では，2008 年５月から西和賀町でのホームスティを「延べ 100 人の子どもたちが体験している」（厚生労働省 2009：64）と報告されている．

ホームスティ事業の前史としては，「夏季転住」（現「カタクリ転住」）と「全国・さわうちまるごと児童養護施設事業」（現「全国・西和賀まるごと児童養護施設事業」）という２つの地域養護活動の取り組みを挙げることができる．夏季転住とは，Ａ児童養護施設の子どもと職員が夏季に１週間，西和賀町（旧沢内村）に転住し，「施設が丸ごと地域にとけ込む」（藤澤 1995：9）取り組みのことである．また，「全国・さわうちまるごと児童養護施設事業」とは，地域を児童養護のフィールドと見立て，首都圏等の児童養護施設の子どもが，町の保存家屋で数日間滞在し，自然探索やボランティア活動等を体験する取り組みのことである．

NPO いのちネットの前代表は，ホームスティ事業に取り組んだ背景について次のように述べている（NPO 法人輝けいのちネットワーク 2010：1）．

> 児童養護施設の子どもたちは，西和賀に来ると落ち着くと言われています．それは昔赤ちゃん等の多病多死を経験し，いのちの大切さを実感している高齢者が多くいるからです．加えて，田畑や山々，暮らしの中で編み出された智恵の数々，つまり「人・自然・文化」の力があるからです．心身を病む子等には，西和賀は必要な場所となっているのです．これが，「子どもが落ち着く」という背景なのです．

では，西和賀の「『人・自然・文化』の力」を育んだ歴史とは，いかなるものだったのであろうか．町村合併で西和賀町になる以前の旧沢内村は，1955 年当時でも，「豪雪，貧困，多病・多死」の三重苦を抱えていた．豪雪で村全体が半年間も雪に閉ざされ，その間，村民は収入の道が断たれるため，人々は貧困状態におかれ，十分な医療を受けることができなかったのである．しかし，深澤晟雄村長時代に「生命尊重」の気風が醸成され，旧沢内村は，65 歳以上の国保被保険者に対する老人医療費10割給付（1960年）や，乳児死亡率ゼロの達成（1962年）等，全国に先駆けて保健，医療，福祉の分野で様々な偉業を成し遂げることとなった．以上が，西和賀の「『人・自然・文化』の力」を育んだ歴史である．

２－２．調査方法

西和賀町における地域養護活動に関する実地調査はこれまでに５回実施しており，そのうち４回の調査でホストファミリーに対する聞き取り調査をおこなっている（【表１】参照）．本稿では 2011 年８月 25 日（第１回調査）にホストファミリーに対して実施した聞き取り調査から得たデータを中心にとりあげる．

調査協力者は，ホームスティ事業でホストファミリーの役割を担ったＣさん（女性）を含む５名である．そのうちの２名は，NPO いのちネットの前代表と現代表である．調査では，ホストファミリーが交わすホームスティ事業に関する思い出話について筆者らが質問をするという非構造化インタビュー（約 60 分間）を採用した．録音はおこなわず，調査終了後にフィールドノーツを作成した．

[2] 「生きられた経験」は，本人の主観的事実を重視してとらえられた現実である．このような立場からすると，たとえば，人がそこにいなくても「声が聞こえる」という現象も，「幻聴」ととらえられるのではなく，本人の固有の体験と位置づけられ，聴こえた声（「聴声」）ととらえられることになる（日本臨床心理学会 2010）．

【表１】調査概況　　作成：井上・笹倉

調査	調査期間	調査内容	
		聞き取り調査	参与観察
第１回	2011/８/23 ～ ８/28	調査協力者：「NPO いのちネット」前代表者・「NPO いのちネット」代表者・ホストファミリー・A 児童養護施設施設長・ホームスティ経験児童・「地域を考える会」メンバー・深沢晟雄資料館館長・旧沢内村元村長・旧沢内村元保健婦	
第２回	2012/２/15 ～ ２/19	A 児童養護施設施設長・A 児童養護施設職員（保育士・保健師）・B 児童養護施設職員（児童指導員）・「NPO いのちネット」前代表者・ホストファミリー・「地域を考える会」メンバー・深沢晟雄資料館館長・旧沢内村元保健婦・町立保育所所長	ホームスティ事業
第３回	2012/８/21 ～ ８/28	「地域を考える会」会員・深沢晟雄資料館館長・行政職員・ホストファミリー・事業主催実行委員会メンバー	第10回全国・西和賀まるごと児童養護施設事業
第４回	2013/２/７ ～ ２/11	「西和賀の雪を見る会」(西和賀町の将来を語る会) メンバー・「地域を考える会」メンバー・深沢晟雄資料館館長	雪あかり（地域行事）
第５回	2013/８/23 ～ ８/27	A 児童養護施設施設長・A 児童養護施設職員（保育士）・ホストファミリー・「NPO いのちネット」前代表者・行政職員・旧沢内村元村長・深沢晟雄資料館館長	ホームスティ事業

なお，上記の聞き取り調査が，調査協力者の１人が畑で収穫したばかりのスイカを持参し，皆でそれを食べながらおこなわれたものであることを付け加えておく．なぜなら，どのような状況において収集されたデータであるかを示すことは，調査協力者にとってそのエピソードがいかなるものとして位置付けられているのかを判断する上で重要であると考えられるからである．

２－３．分析の視点

ホームスティ事業に参加したＤ児（小学校高学年，女児）とＤ児の育ちに関わる西和賀町の「ひと・もの・こと」との関係が表れているエピソードを取りあげて分析する．なぜなら，事例の一部分であるエピソードは，「読み手の了解可能性という意味での一般性，公共性を目指すもの」（鯨岡 2005：44）であり，「他者の経験世界に可能的に開かれている」(鯨岡 2005:45) からである．そして，そもそも，質的研究のバックボーンには，人間と世界に関する次のような認識があることを確認しておきたい．「人間は，彼・彼女が生きる時代と社会に型どられた，状況関連的なコンテキストのなかでしか生きることができない，ということである．人間は，みずからの位置でみずからの役割を演じることで状況に参加し，状況を主体化する．そして，その状況は世界に繋がっている」（青木 2000：170 - 71）．

分析では，Ｄ児と彼女の育ちに関わる西和賀町の「ひと・もの・こと」との関係がどのように形成されていったのかについて，Ｄ児の「生きられた経験」の観点から検討を加える．なぜなら人は，自らの身体を中心として延び広がり，絶えず生成と消滅を繰り返す「ひと・もの・こと」との多様な関係の網の目に生きているからである．

２－４．倫理的配慮

本研究は，関西福祉大学社会福祉学部研究倫理審査委員会に承認され，日本保育学会倫理綱領，及び，日本社会福祉学会研究倫理指針に則っておこなったものである．

研究結果を公表するにあたり，個人や施設が特定されるような固有名詞は，ランダムにアルファベット表記とする等の人権に対する配慮をおこなった．また，すでに著作物等で固有名詞が公表されている場合については，固有名詞のまま表記した．

３．結　果

下記は，ホストファミリーであるＣさん（女性）が，ホームスティ事業における思い出の１つとして語った（2011 年８月 25 日），児童養護施設の子どもであるＤ児（小学校高学年，女児）に関するエピソードをまとめたものである．Ｄ児は被虐待の経験を有している．

西和賀町にやってきたＤ児は，Ｃさんに対して，最初は「こんな，なんにもないとこ……」ととても不満げであった．「コンビニもない，ゲーセンもない，カラオケもない，なんにもない！」と，口をとがらせてあげつらっていた．自分が期待するようなものが西和賀町には

何ひとつなかったからである．

そのようなＤ児に対してＣさんは，「だから，あなたたちに来てもらったの」と応答した．やがて，ホームスティを終えて帰る頃，Ｃさんと一緒に歩いていたＤ児は，Ｃさんに向かって，「おばさん，かわいい花が咲いている！」，「おばさん，チョウチョがとんでる！」というように，自分が見つけたものを次々と伝えるようになった．

Ｄ児にとって西和賀町は，週末に行きたいと願うような場所ではなかったのであろう．１人の知り合いもおらず，何をして２日間を過ごせばよいのかという戸惑いもあったに違いない．はるばる時間をかけてやって来たにもかかわらず，コンビニエンスストアもゲームセンターもカラオケボックスもなかったため，不満が噴出したと言える．ところが，Ｃさん宅でのホームスティを終えて帰る頃になると，「かわいい花」や「チョウチョ」がＤ児の目に映るようになった．同時にＤ児はＣさんに，「かわいい花」や「チョウチョ」を見つけたことを伝えたいと思うようになったのである．

Ｄ児が西和賀町に滞在したのは１泊２日である．このような短い期間に，突如として，西和賀町に「かわいい花」が咲き，「チョウチョ」が舞うようになったわけではない．Ｄ児が訪れたときから西和賀町には花が咲き，蝶が舞っていたはずである．またＣさんの人柄が，このような短い期間に変化したとは考え難い．

したがって，まず，Ｄ児とＤ児をめぐる「もの」との関わりという点から言えば，西和賀町を訪れた当初は，Ｄ児にとって目に映らなかった「もの」が，目に映る「もの」になったということである．つまり，Ｄ児と花や蝶との間には，当初，無意味な関係しか形成されなかったが，やがて，有意味な関係が形成されたということである．

次に，Ｄ児とＤ児をめぐる「ひと」との関わりという点から言えば，西和賀町を訪れた当初は，Ｄ児にとって不満をぶつける対象でしかなかった「ひと」が，新たに発見した「こと」を伝える「ひと」になったということである．Ｃさんが，新たに発見した「こと」を伝える「ひと」になったというのは，新たな「もの」を発見した自分をＣさんに見てもらいたいという行為であり，Ｃさんからの関心を期待する気もちが込められていると言える．またＣさんが，このエピソードを語ったということから，Ｄ児の伝えるという行為はＣさんによって受けとめられ，ＣさんはＤ児が発見した「もの」をＤ児と一緒に見ていたことがわかる．つまり，Ｄ児とＣさんとの間には，当初，一方的な関係しか形成されなかったが，やがて，相互的な関係が形成されたということである．

最後に，Ｄ児とＤ児をめぐる「こと」との関わりという点から言えば，西和賀町を訪れた当初は，Ｄ児にとって自分が体験する「こと」を共有したい「ひと」はいなかった．ホームスティで体験する「こと」は，どのような「こと」であってもＤ児自身にのみ関わる「こと」，すなわち，個人的な関係において生じる「こと」に過ぎなかった．しかし，Ｃさんが自らの体験を共有したいと思える「ひと」と感じられるようになるにつれ，Ｄ児にとって，ホームスティで体験する「こと」は，Ｄ児とＣさんの共同的な関係において生じる「こと」になったことがわかる．つまり，Ｄ児とホームスティの体験という「こと」との間には，当初，個人的な関係しか形成されなかったが，やがて，共同的な関係が形成されたということである．

以上，児童養護施設で育つ社会的養護児童の子育ての社会化において，社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で明らかになった関係形成過程は次の３とおりである．１つは，「もの」との間で無意味な関係から有意味な関係が形成されるという過程である．２つは，「ひと」との間で一方的な関係から相互的な関係が形成されるという過程である．３つは，「こと」との間で個人的な関係から共同的な関係が形成されるという過程である．

４．考　察

西和賀町におけるＣさん宅での１泊２日のホームスティにおいて，Ｄ児とＤ児の育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で３とおりの関係形成過程が明らかになった．以下では，このような関係形成過程が認められたということは何を意味しているのか，また，このような関係形成過程が，なぜ認められるようになったのかについて考察する．

４－１．関係形成過程が認められたということの意味

３とおりの関係形成過程が認められたということは，何を意味しているのであろうか．既述のように，Ｄ児の西和賀町滞在中に，突如として，西和賀町に花が咲き，蝶が舞うようになったわけではない．Ｄ児が訪れたときから西和賀町には，花が咲き，蝶が舞っていたはずで

ある．したがって，D 児の目に花や蝶が映るようになったということは，D 児が花や蝶の存在を認識するようになったということである．つまり，「もの」との間で，無意味な関係から有意味な関係へ変化するという関係形成過程が認められたということは，西和賀町にある「もの」が変化したのではなく，西和賀町にある「もの」に対する D 児の認識が変化したということなのである．

また同様に，C さんの人柄が短い期間に変化したとは考え難い．C さんが花や蝶を発見した「こと」を伝える「ひと」になったということは，D 児が C さんを，自らに関心を示して欲しい人として認識するようになったということである．つまり，「ひと」との間で，一方的な関係から相互的な関係へ変化するという関係形成過程が認められたということは，西和賀町にいる「ひと」が変化したのではなく，西和賀町にいる「ひと」に対する D 児の認識が変化したということなのである．

D 児が西和賀町で体験した「こと」は，西和賀町における「もの」と「ひと」によって織りなされた体験である。しかも，西和賀町における「もの」と「ひと」に対する D 児の認識は変化した．それゆえ,「こと」との間で，個人的な関係から共同的な関係へ変化するという関係形成過程が認められたということは，D 児が西和賀町で体験した「こと」が変化したのではなく，D 児が西和賀町で体験した「こと」に対する D 児の認識が変化したということなのである．

以上から，「もの」との間，「ひと」との間，「こと」との間に 3 とおりの関係形成過程が認められたということの意味は，D 児に認識の変化が引き起こされたということであると言える．

４－２．関係形成過程が認められた要因

なぜ，3 とおりの関係形成過程が認められたのか，すなわち, D 児の認識の変化要因は何だったのであろうか．既述のように，D 児をめぐる「ひと」との間で相互的な関係が形成され，D 児をめぐる「こと」との間で共同的な関係が形成された．相互的な関係や共同的な関係というのは，C さんが存在しないところで，D 児によって単独で形成されるのは不可能である．それゆえ，このような関係形成過程には C さんの存在が影響していたと考えられる．

同様に，D 児をめぐる「もの」との間の関係形成過程にも C さんの存在が影響していたと考えられる．その理由は以下のとおりである．C さんと一緒に歩いていた D 児は，自分が新たに発見した「もの」を C さんに伝えるとき，「かわいい花が咲いている！」,「チョウチョがとんでる！」とは言わなかった．D 児は，「おばさん，かわいい花が咲いている！」,「おばさん，チョウチョがとんでる！」というように，最初に「おばさん」と呼びかけたのである．そこからは，新たな「もの」が発見される契機としての C さんの存在が浮かび上がってくるからである．

ところで，児童養護施設の子どもが，なぜ排除状態から抜け出せないのかということを研究テーマとしている谷口は，排除の渦中にある当事者が，「現在の生活をどう捉えるかは, 生活主体抜きに考えることは困難であり，さらに生活実践上では主体形成が重要な要素となる」(谷口 2011：16) と述べている．「現在の生活をどう捉えるか」とは，現在の生活に対する認識を指している．したがって，谷口の議論を援用すると，被虐待の経験を有している D 児に認識の変化が引き起こされた要因を考察するには，D 児の主体形成について検討しなければならないことがわかる．

では，D 児の主体形成に C さんの存在はいかにして影響を及ぼしていたのであろうか．結論を先取りすれば，それは D 児に対する C さんによる「順接の受けとめ」である．ここで言うところの順接の受けとめとは，「こんな，なんにもないとこ……」と不満げな D 児を前にしたときの, C さんによる「だからあなたたちに来てもらったの」という，順接の接続詞「だから」に象徴される応答である．

C さんは，D 児の言うとおり，西和賀町には D 児が望むようなものは何もないことを認めた上で，だからこそ，D 児たちに来てもらったのだと伝えている．D 児の不満は，不満のまま，自分と友人たちの存在が西和賀町にとって必要とされる理由として位置づけられることになった．その結果，D 児は，C さんによってあるがままの存在をまるごと受けとめられる経験，すなわち，存在を肯定される経験をしたのである．

順接の受けとめが，C さんによる D 児の存在肯定に結びついていることは，C さんの応答を一般的におこなわれがちな応答と比較することによって明確になる．多くの人は，不満げな D 児を前にしたとき，自分の町の素晴らしさを伝えて，D 児の気もちをやわらげようとするに違いない．とりわけ，これから 1 泊 2 日の生活を共に過ごすホストファミリーであるならばなおさらであろう．たとえば, D 児に対して,「西和賀町にはコンビニも,

ゲームセンターも，カラオケもない．でも，西和賀町の空気はおいしいし，山の緑はきれいだし，かわいい花も咲いているし，チョウチョもとんでる」というように，思いつく限りの西和賀町の良さをＤ児に向けてアピールする可能性が高い．しかし，このような応答は，「でも」という逆接の接続詞に端的に表われているように，Ｄ児の不満を受けとめたものとはなっていない．Ｄ児の不満を解消させようとして，Ｄ児に対して説得をおこなっているに過ぎない．Ｄ児にしてみれば，自分がまるごと受けとめられたと感受するのは困難であり，場合によっては，自分が否定されたとさえ感じるかもしれないのである．

順接の受けとめが存在肯定につながることは，雪あかり[3]に関する次のエピソードからも言える．下記は，Ｃさんが，雪あかりの１週間後のホームスティ事業における印象的な出来事として語った（2012年２月19日），児童養護施設の子どもであるＥ児（小学校低学年，女児）とＦ児（小学校中学年，女児）をめぐるエピソードをまとめたものである．

今回は，Ｅ児とＦ児の２人がやってきた．Ｅ児には雪を見て外に行きたそうな素振りがみられた．しかし，Ｆ児は本を読むのが好きらしく，「私はこたつがいい」と言うので，みんなでこたつに入って丸くなっていた．夕方になり，先週の雪あかりで作ったミニかまくらがまだそのまま残っていたので，「ちょっと外に出てみよう」と２人を誘った．みんなでミニかまくらを修理して，ろうそくの灯をともした．するとＦ児が，「あぁ，きれいだわぁ」って言ったので，「だから，一緒につくりたかったんだよ」って話をした．しかしＦ児は，すぐに「だけど寒いもん」と言ったので，再びまた３人で，こたつに入って丸くなった．

Ｆ児は，「だから，一緒につくりたかったんだよ」という順接の受けとめによって，Ｃさんから存在を肯定される経験をしたのであろう．そのことはＦ児が，寒いのを我慢して戸外で雪あかりを鑑賞するのではなく，こたつで読書をしたいがために，「だけど寒いもん」と素直に口に出したことからも推察できる．

[3] 雪あかりとは，毎年２月におこなわれる西和賀町の冬の恒例行事である．町内の家々や施設，または地区で，趣向を凝らした雪像やミニかまくらなどを作り，その一部をくり抜いて中にろうそくを灯して楽しむものである．雪深い地域ならではの行事で，町全体が幻想的な雰囲気に包まれる．

以上をとおして言えることは，Ｃさんによる順接の受けとめは，Ｄ児にとって存在を肯定される経験になったということである．このような存在肯定の経験により，Ｄ児に自己肯定感を含む自己概念が形成されたと考えられる．なぜなら，自己肯定感を含む自己概念の形成には，周りにいる人からの承認が必要とされるからである（遠藤・井上・蘭 1992）．

このようにみてくると，順接の受けとめというＣさんによる承認をとおしてＤ児に自己肯定感を含む自己概念の形成，すなわち，そのような自己概念を伴う主体形成がうながされたと言える．そして谷口（2011）によれば，既述のように，主体形成と認識の変化は不可分であるため，Ｄ児の認識の変化要因は，Ｃさんによる順接の受けとめであると考えられるのである．

５．結　論

本研究の目的は，児童養護施設で育つ社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との関係形成過程を，社会的養護児童の子育ての社会化に注目して明らかにすることであった．

「ホームスティ事業」に参加した社会的養護児童のエピソードをとりあげ，「生きられた経験」の観点から分析を加えた結果，社会的養護児童の子育ての社会化において，社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で明らかになった関係形成過程は，次の３とおりであった．１つは，「もの」との間で無意味な関係から有意味な関係が形成されるという過程である．２つは，「ひと」との間で一方的な関係から相互的な関係が形成されるという過程である．３つは，「こと」との間で個人的な関係から共同的な関係が形成されるという過程である．

上記の結果をふまえ，次の２点について考察した．１点，Ｄ児とＤ児の育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間で３とおりの関係形成過程が認められたということは，Ｄ児に認識の変化が引き起こされたということである．２点，Ｄ児の認識の変化要因は，Ｃさんによる順接の受けとめである．

ところで，「２－２．調査方法」でも述べたように，Ｄ児に関するエピソードは，調査協力者の１人が畑で収穫したばかりのスイカを持参し，それを皆で食べている最中に，Ｃさんによって語られたものであった．その日の話題は，赤色のスイカを作るつもりで種を播いて育てていたのに，収穫して割ってみると黄色のスイカであった

という話で盛り上がっていた．スイカの話に興じていた調査協力者たちは，C さんの話を聞いても，とりたてて驚く様子もなく，「んだね」と，そんなこともあったね，というように会話が続いていった．その場の雰囲気から推察されるのは，C さんにとって D 児に関するこのような応答は，特別なこととしてなされたものではないということである．また，このようなエピソードは，C さんだけが経験しているのではなくホームスティのありふれたひとコマであり，ホストファミリーの多くが経験している可能性が高い．

したがって，C さん以外のホストファミリーから語られるエピソードも重ねていくことにより，西和賀町でおこなわれている子育ての社会化としてのホームスティ事業において，社会的養護児童と彼女/彼らの育ちに関わる地域の「ひと・もの・こと」との間でいかなる関係形成過程が認められるのかについて，広く，かつ，深く検討することができるのではないかと考えている．今後の課題である．

＊本研究は，日本学術振興会平成 22 － 24 年度科学研究費（研究課題番号：22500707，研究代表者：井上寿美）の助成を受けておこなったものの一部である．
＊本稿は，日本保育学会第 65 回大会（於：東京家政大学，2012 年 5 月 4 日－ 5 日）での発表内容に大幅に加筆修正をおこなったものである．

【文献】

青木秀男（2000）『現代日本の都市下層－寄せ場と野宿者と外国人労働者』明石書店．
網野武博（2000）「『育ち』の力・『育て』の力」『子ども家庭福祉情報』16，46–49.
遠藤辰雄・井上祥治・蘭千寿（1992）『セルフ・エスティームの心理学－自己価値の探求』ナカニシヤ出版．
藤澤　昇（1995）「社会の中で生まれ，育つ学園」『夏季転住物語 さわうち むろね かどのはま 紀行文』みどり学園文集企画部，9.
井上寿美（2012）「子育ての社会化における親による養育責任－子育てに関する責任の所在と担われ方の検討をとおして－」『関西福祉大学社会福祉学部研究紀要』16（1）.
鯨岡　峻（2005）『エピソード記述入門－実践と質的研究のために－』東京大学出版会．
厚生労働省（2009）『平成 21 年版　高齢社会白書』.
森田明美（2000）「子育ての社会化～今，これから」『子ども家庭福祉情報』16，50–54.
日本臨床心理学会（2010）『幻聴の世界－ヒアリング・ヴォイシズ』中央法規出版．
NPO 法人輝け「いのち」ネットワーク（2010）『ホームスティの記録』.
谷口由希子（2011）『児童養護施設の子どもたちの生活過程－子どもたちはなぜ排除状態から抜け出せないのか』明石書店．